

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：24403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520679

研究課題名(和文)ライティングセンターにおけるチューターの成長支援に関する実態調査

研究課題名(英文)A study of writing center tutors' professional development

研究代表者

藤岡 真由美 (Fujioka, Mayumi)

大阪府立大学・高等教育推進機構・准教授

研究者番号：40351572

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では日本の大学の英語ライティングセンターにおけるチューターの成長を研究した。6つの大学ライティングセンターから収集した質的データを通じて、チューターの成長はEngestrom (1999, 2001)の提唱するActivity Theory (活動理論)を通じて説明できることがわかった。また、少数のチューターに絞って経年変化を詳細に分析した結果、チューターの仕事が意味することには個人差があり、チューターとしての成長は各チューターのライティングセンター内外での教育的体験とそれに伴う心的変化に関係することがわかった。

研究成果の概要(英文)：This study addressed the professional development of writing center tutors of English writing at Japanese universities. Findings based on qualitative data from six writing centers reveal that tutors' professional development can be effectively explained through Activity Theory (Engestrom, 1999, 2001). Furthermore, longitudinal analyses of data from a selected number of tutors over several years indicate that being a tutor has different implications among individuals and that professional tutor development is related to tutors' educational experiences in and outside writing centers and their psychological changes based on those experiences.

研究分野：英語教育学、応用言語学

キーワード：ライティングセンター チューターの成長 チューター育成

1. 研究開始当初の背景

学生が正規の授業外でライティングの個別指導をチューターから受けるライティングセンターはアメリカで始まり、80年以上の歴史を経て現在アメリカの大学ではほぼどこでも設置されている。元来ライティングセンターは英語母語話者であるアメリカ人学生の中で、授業で求められるアカデミックライティングを適切に遂行するために授業外での助けが必要な学生を対象に始められた。その指導の根幹をなすのは仲間同士による協同学習の考えであり、ライティングセンターでは指導を受けた学部生、大学院生が仲間(ピア)として学生の指導をする「ピアチューター」形式が一般的である。さらに、「自立した書き手の育成」(North, 1984)という目標の下、チューターは学生の作成した文章を単に添削することはせず、論理構成、および読者を意識した書き方などを中心に、学生との対話を通してライティングのプロセスを指導することが求められる。

1990年代以降アメリカのライティングセンターでは英語を第2言語とする ESL (English as a Second Language) 学生(以下 L2 学生)の増加にともない、アメリカ人学生(以下 L1 学生)を対象としてきた教育目標、実践を見直す必要が出てきた。また第2言語習得、および第2言語ライティングの学問の発展にともない、L2 学生に関するライティングセンター研究(例 Nakamaru, 2010; Thonus, 2004)は着実に増えてきた。

日本における大学ライティングセンターは2000年代半ばに相次いで設立されたが、2009年時点では11大学とまだその歴史は浅かった。Johnston, Cornwell, & Yoshida (2010)など日本のライティングセンターについての研究も出てきたが、その時点では実証研究はほとんど成されていなかった。また、Writing Centers Association of Asia という学会が設立され、日本およびアジア諸国のライティングセンターでどのような指導が行われているかについて研究、実践発表を通じて情報の交換が始まったばかりであった。

2. 研究の目的

本研究では日本の大学ライティングセンターにおけるチューターの成長支援に焦点をあてた。具体的には(1)チューター訓練と成長支援実施の実態、(2)チューター自身が感じる効果的なチューターとしての資質やスキルの解明、および(3)チューターの成長に必要なとされる支援体制、を当初の研究目的として出発した。

しかしながら、以下の「研究の方法」および「研究成果」で述べるように、研究を進めていく上で修正を余儀なくされることが出てきたため当初の目的を変更し(1)チューターの成長をどのような理論で説明できるのか、(2)個々のチューターに注目した場合、チューターの成長とは何を意味しどのよ

うな成長過程をたどるのか、の二つを改訂した研究目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、英語ライティングの指導を提供しているライティングセンターに焦点をあてた。

研究開始1年目(平成24年度)において、当初の研究目的に従い進めるためにメール添付により電子ファイルに回答を記述するアンケートを実施した。アンケート自体の改良も目的としてパイロットスタディとしての位置づけで、その時点で英語ライティングセンターを提供している情報を得ていた4大学のライティングセンター担当者または責任者より回答を得た。しかしながら、回答送付の大幅な遅れおよび回答依頼自体の忘れがあり、また予備分析の段階において質問で意図したことに対する回答の叙述が不十分である場合も多くみられ、アンケート調査の限界が明らかになった。

以上の状況を踏まえ、さらなるアンケート調査を実施せず、個別のライティングセンターを訪問し、担当者およびチューターにインタビューを実施することにより、より詳しく深い内容の回答を引き出すことができる質的研究の手法に限定することにした。

以下、研究方法のまとめとして、訪問およびインタビューを実施した大学の情報一覧を記載する。なお、データ収集に関しインタビューを実施した個人全員から、文書による研究への同意を得た。また、同意文書の中では、大学名、個人名は全て匿名とする旨も記載しているため、本報告書においてもそれを踏襲する。

(1) 国立大学3校

国立大学A(関東)

ライティングセンター設立担当教員1名、ライティングセンター実施担当教員1名、チューター9名

チュートリアル見学、チューター訓練ミーティング見学、この大学主催のシンポジウムへの参加

国立大学B(中部)

ライティングセンター担当教員1名、チューター担当院生参加の大学院授業見学、チューター訓練合宿の学外提供用DVD

国立大学C(中国)

ライティングセンター担当教員1名、ライティングセンター担当事務職員2名、チューター4名、チュートリアル見学

(2) 私立大学3校

私立大学A (関西)

ライティングセンター設立、責任担当教員1名、チューター3名

私立大学B (関東)

ライティングセンター担当教員1名、チューター2名、チュートリアル見学

私立大学C (関東)

ライティングセンター担当教員2名

上記の他に、全ての大学についてその大学が提供しているライティングセンター紹介のパンフレット、およびライティングセンター利用者向けの学習案内文書などの参考資料の提供も受け、データとして利用した。インタビューについては、相手の同意を得て全て録音し書き起こした。インタビューの使用言語は、相手の希望に合わせて日本語か英語とした。インタビューの書き起こしを一次資料とし、文書などの参考資料およびチュートリアル見学の際の手書きのフィールドノートを二次資料とした。

データ分析方法では、質的研究において広く用いられる Constant comparative method (Merriam, 2009) の手法を用い、インタビューデータから各大学における特徴を示す項目を拾いだし、それを二次資料と照らし合わせ再度インタビュー結果に戻って確認する作業を繰り返した。さらに、ひとつの大学において複数のチューターからのインタビューを得た場合は、チューター個人間の共通点、相違点を共通の項目のもとに見つけ出していった。さらに、改訂した研究目的に沿ってデータを説明する叙事的枠組みを提供する理論を探し出し、その理論に対する理解を深めたうえで再度データから得られた結果がその理論の枠組みにどのようにあてはまるかを検討した。

なお、研究期間の後半2年間(平成26, 27年度)においては国立大学Aにおけるデータ収集に焦点をあてた。これは、研究開始2年目にてデータ分析に使用する理論を見つけ出し、その理論の中ではコミュニティーの概念が重要であったため、特定の大学におけるライティングセンター実施とチューターの成長に注目すべきであると考えたためである。さらに、国立大学Aは本研究に対して特に協力的であり、継続してデータ収集が可能であった。さらに国立大学Aにおける9名のチューターのうち2名については複数回のインタビューを実施でき経年的変化が観察できたことにより、本研究の目的を遂行するために有用なデータを収集することができた。

4. 研究成果

本研究の成果を以下の項目に従い説明する。

(1) 日本のライティングセンター全体について得た知見、(2) 研究目的の1番目に關し、チューターの成長を理論的にどのように説明できるか、(3) チューターの成長過程が意味すること、および(4) 本研究で得られた結果が国内外のライティングセンター研究に占める位置づけと今後の展望。

(1) ライティングセンター全体に対する知見

「研究当初の背景」で述べたように、日本の大学ライティングセンターは、アメリカのライティングセンターにおける「自立した書き手の育成」をもとにしているという概念を出発点として本研究を開始した。実際その目標は共有されているが、明らかになったことは大学によりライティングセンターで扱うライティングの種類には大きな違いがあり、またライティングセンターの運営が大学の重視するライティングの概念および教育カリキュラムと密接に結びついているということである。

例えば国立大学A,B,Cの場合、Aは学部1年生が正規の英語授業で学ぶ研究論文の書き方についてのサポートをライティングセンターが担っているのに対して、Bではライティングセンター利用対象者は大学院生であり、英語および他の言語での学术论文における論理的側面を特に重視していた。それに対してCではライティングセンター利用者は学部生、大学院生両方であり、対象とするライティングも日本語と英語の両方であり、学部生の授業レポートから日本人学生、留学生の両方の修士、博士論文、学会投稿論文に至るまで多岐に渡っていた。

また、国立大学3校ではチューターは原則大学院生であり、留学生院生がチューターの場合も多くみられた。Aではライティングセンター担当教員の指導のもとにチューター育成が行われているが、B,Cではチューターの自主的な運営やチューターミーティングが実施されていた。またCについては、ライティングセンターが大学教員の英語論文執筆や出版に関するサポートも担っている点が特徴的であった。

以上の国立大学3校に対して、私立大学3校の場合は、ライティングセンター利用者は学部生であり、サポートするライティングも授業での英語ライティング課題が中心であった。Aの場合チューターはその大学の教員が原則務めていたが、Bではその大学に在籍していた院生、Cでは学部生が担当しており大学によって大きな違いがあった。

以上のように、ライティングセンターと言っても利用者、チューターの特性、そして対象とするライティングの種類やレベルにおおきな違いや差があることがわかった。

(2) チューター成長の理論的枠組み
チューターの成長を説明する上で有効な理論として、Activity Theory (Engeström, 1999, 2001)(活動理論)(以下 AT とする)が挙げられる。AT では人間の学習活動を Activity System (AS)としてとらえ、ライティングセンターのチューターとしての活動も AS とみなすことができる。AS では、学習者は学習目標を達成するために様々な媒介手段を利用し、目標達成は有形、無形のコミュニティの中で営まれコミュニティ内ではルールが存在し、構成員は様々な役割を担う。

以上の AT における抽象的な概念を本研究で得たチューターからのインタビューデータを分析した結果をあてはめると以下ようになった。チューターはライティングセンター利用者が書き手として成長することを目標とし、それを媒介する手段としてライティングマニュアル、パソコンのツールなどの物理的道具から自分の過去のライティング成功体験などの記憶や体験といった非物理的な道具を活用していた。また、ライティングセンターはチューターにとってコミュニティとして機能し、そこでは様々なルール(一回の個別指導の制限時間、添削の禁止など)が存在した。さらに、コミュニティ内の役割についてはチューターの心理的側面に関わることが多く、例えば大学院生のチューターでは利用者と教師の間の中間的存在をイメージしたり、意図したりしていた。

なお、チューターの成長に関しては AT における「緊張または矛盾」という概念が有効であった。Engeström (2001) は AS の中では、それぞれの構成要素の内部に、あるいは構成要素間に緊張関係が生じたり矛盾が発生したりするが、それらの障害を乗り越えることにより成長が生まれるとしている。この点を本研究のデータから説明すると、チューターは個別指導の制限時間というルールに従う必要があるが、一回の指導時間で利用者のライティングについての問題点を網羅できないという矛盾に遭遇する。それを乗り越えるために指導の優先順位を決めて対応し、制限時間で扱うことのできなかった点については利用者がチューターリング以外の場において自分でその作業を遂行できるように道筋やヒントを示すことにより矛盾を克服し、その過程を通じて効果的な個別指導の仕方を体得しチューターとして成長する。

以上チューターの成長を抽象的な枠組みで説明した場合、Engeström (1999, 2001) の提唱する Activity Theory が有効であることがわかった。

(3) チューターの成長過程が意味すること
研究方法の最後に述べたとおり、研究期間の後半2年間においては国立大学Aからのデータ収集に焦点をあてた。A校からは4年間で9名のチューターからのデータを得ること

ができ、さらにその中の2名については経年的変化を観察することもできた。以上のA校からのデータを AT に照らし合わせて深く分析した結果、以下が明らかになった。

A校ライティングセンターの特徴は、学部生の理系実験結果をもとにした研究論文作成をサポートするためにライティングチューターの他に科学分野専門のチューターが存在することである。

チューターの成長については、経年変化を見ることができた2名のチューター(AとB)について以下の考察が得られた。AとBはともに日本人の女性で、A校の大学院生であり言語学、英語教育学に関わる分野を専攻している。しかしながら、ライティングセンターチューターが意味することは二人にとって大きな違いがあった。チューターAは教育に関心があり、チューターの仕事を学生の成長として教育的観点からとらえ、また他大学で非常勤講師の仕事も追加されたことから、教室で教える体験と個別指導を比較対照しながらチューターの役割を考えていた。それに対してチューターBの場合は、教える観点ではなくチューターの仕事を学生と興味のある学術的話題についてライティングを通じて共有する場であるととらえていた。またチューターBにとってコミュニティとしてのライティングセンターとは、本来関心がある理系のトピックについて科学チューターと交流を深め自分の関心を広げ進化させていく場として機能していた。

以上の二人のチューターのライティングセンター観およびチューター観の違いは二人に複数回のインタビューを実施し、心的状況の経年的変化を探る中で明らかになったことである。したがって、チューターの成長とは個別指導の場での話し方や指導の仕方の変化から観察できる側面もあるが、心的側面の変化を深く探ることにより明らかになる面もあるということを示した。

(4) 本研究で得られた結果の位置づけおよび今後の展望

研究開始当初は日本のライティングセンターについての実証研究自体が少なかつたため、一定量のデータを収集しデータから導かれる結果を明らかにすることができた点で本研究は意義があったと考える。また、本研究期間の4年間を通じて参加した学会、およびライティングセンター研究会を通じて日本のライティングセンターに関する研究発表は着実に増えていると実感した。しかしながら、多くの場合個別のライティングセンターで実施していることの紹介や報告が多いのも実情である。本研究で取り組んだように複数または個別のライティングセンターのデータを普遍性のある理論的枠組みで説明することができれば、世界に通用する研究となる。この研究の成果を今後論文として完成させ国際学術誌に投稿する予定であるが、世

界に通用する日本ライティングセンター研究として本研究が認められるよう努力したい。

なお、本研究で不十分であった点として実際のライティングの個別指導からの一次資料データが得られなかった点が挙げられる。これは、各大学ともライティングセンター利用者のプライバシーを保護するために、利用者へのインタビューおよび個別指導の録音を部外者には許可していなかったためである。そのためライティングセンター研究をさらに進めるためには、研究者が個別指導からの一次資料データにアクセスできる方法を検討することが今後の課題であると考え。

<引用文献>

Engeström, Y. (1999). Activity theory and individual and social transformation. In Y. Engeström, R., Miettinen, & R-L, Punamäki (Eds.), *Perspectives on Activity Theory* (pp. 19-38). Cambridge, UK: Cambridge University Press.

Engeström, Y. (2001). Expansive learning at work: Toward an activity theoretical reconceptualization. *Journal of Education and Work, 14*, 133-156.

Johnston, S. R., Cornwell, S., & Yoshida, H. (2010). 「大学ライティングセンターの構築と運営に関する研究 EFL の視点から」科 研費研究報告 No 19520531

Merriam, S. B. (2009). *Qualitative research: A guide to design and implementation*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.

Nakamaru, S. (2010). Lexical issues in writing center tutorials with international and US-educated multilingual writers. *Journal of Second Language Writing, 19*, 95-113.

North, S.M. (1984). The idea of a writing center. *College English, 46*, 433-446.

Thonus, T. (2004). What are the differences? Tutor interactions with first- and second-language writers. *Journal of Second Language Writing, 13*, 227-242.

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

{ 雑誌論文 } (計 1 件)

Fujioka, M. (2012). Pragmatics in writing center tutoring: Theory and suggestions for tutoring practice. *Kinki University Center for Liberal Arts & Foreign Language Education Journal, 3*(1), 129-146. 査読なし

{ 学会発表 } (計 8 件)
主要なもの

Fujioka, M. *EAP writing tutors' development of genre knowledge for science papers*. Paper presented at the 14th Symposium on Second Language Writing, 2015 年 11 月 19 日, Auckland, New Zealand.

Fujioka, M. *Program design for writing center tutors' professional development*. Paper presented at the 13th Hawaii International Conference on Education, 2015 年 1 月 5 日, Hawaii, USA.

Fujioka, M. *Writing center tutors' professional development from an activity theory perspective*. Paper presented at the 17th World Congress of Applied Linguistics, 2014 年 8 月 11 日, Brisbane, Australia.

{ 図書 } (計 0 件)

{ 産業財産権 }
出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

{ その他 }
ホームページ等 なし

6 . 研究組織

(1) 研究代表者
藤岡 真由美 (FUJIOKA, Mayumi)
大阪府立大学
高等教育推進機構 准教授
研究者番号 : 40351572

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし